

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」
～地域とのかかわりを生かした活動を通して～

生活科の学習は、児童が自分とのかかわりの中で、身近な人々、社会及び自然に直接働きかけ、また、働き返されるという双方向の活動をめぐって展開される。

子ども達を取り巻く環境は時代の流れとともに変化し、地域の社会や自然と直接かかわることも少なくなってきた。また、人と人とのかかわりが希薄化していることも大きな課題である。身近な人々、社会及び自然とのかかわりを生かした活動を仕組み、子どもたちの新たな気付きを促すことで、子ども達はたくさんの疑問や驚きを発見し、生き生きと学ぶことができると考えこのテーマを設定した。

I 研究の内容

1 実践紹介

日々の授業について実践を紹介し合い、授業に生かす。
地域とのかかわりを生かした活動について学び合う。

2 臨地研修

「低学年向け秋のプログラム」 講師 インタープリター 榮永智洋さん
金川の森で体験活動を行った。

3 学習会

「子どもが生き生きと学ぶ生活科」 講師 極楽寺眞理子先生

4 研究授業

第1学年 「いろやかたち たくさんみつけた」
授業者 山梨小学校 丸山英子先生

今回は、季節毎にかかわってきた公園に秋探しに訪れたことから得た気づきや遊びを「遊びひろば」にしてみんなで楽しむという授業であった。様々な遊びに生き生きと取り組む子どもたちの様子から、何度も公園を訪れることで気づきが深まり、遊びのアイデアが広がっていった様子が伺えた。子どもの思いや願いを大切にしながら、繰り返し対象にかかわっていく場を設定することで、子どもたちの気づきが深まることを改めて感じた。また、豊かな自然認識・社会認識を育てるためには、教師自身が地域を知り、

進んで地域とかかわっていくことが大切であると再認識できた。

Ⅱ 成果と課題

1 成果

- ・実践紹介では、同じ単元の実践でも各校それぞれ異なった工夫や取り組みがあり、互いの実践に学ぶことが多かった。実際に授業で使用したワークシートや児童が制作した物を持ち寄ることで、更に深く学び合うことができた。
- ・臨地研修では、金川の森を歩き、自然の中で体験活動を行った。実際に自然を観察し体験することで、教師自身の知識を広めたり自然認識を深めたりすることができた。インタープリターカー（IPカー）の内容や展開の仕方なども紹介してもらった。
- ・極楽寺先生を招いた学習会では、生活科という教科の本質について、再度学び合い確認することができた。生活科の成り立ちから、教師としてどう生活科とかかわっていくのかなど多岐にわたる内容のお話を聞くことができた。
- ・生活科という教科の特性からも、地域をテーマに研究を進めていくことは取り組みやすく、適切であった。
- ・実践報告や授業研究、臨地研修や学習会などを通し、テーマである「子どもが生き生きと学ぶ生活科」に迫ることができた。
- ・地域とかかわることをテーマに3年間の研究を行ってきた。地域とのかかわりを生かした活動を仕組むことで、子どもたちはたくさんの疑問や驚きを見つけることができ、生き生きと活動する姿が見られたことは大きな成果であった。

2 課題

- ・今年度の授業研究は、今までにない単元を扱うことができ良かった。研究授業の時期が決まっているので、どうしても授業内容が毎年似通った内容になってしまう。無理しない程度で様々な内容を扱えるように工夫していく必要がある。
- ・少人数の部会で学び合うメリットも大きかったが、理科・社会・総合とつながっていくことを考慮すると低学年の教師のみの部会ではなく、様々な学年の先生方にも参加していただき、広い視点で研究を進めていくことの必要性も感じた。
- ・新学習指導要領について、目標の設定や評価方法など共通認識をもって取り組めるようにしていきたい。

（ 部長 中村 悦美）